

藪の中

芥川龍之介

青空文庫

検非違使けいひいしに問われたる木樵きこりの物語

さようでございます。あの死骸しがいを見つけたのは、わたしに違いございません。わたしは今朝けさいつもの通り、裏山の杉を伐きりに参りました。すると山陰やまかげの藪やぶの中に、あの死骸があつたのでございます。あつた処ところでございますか？ それは山科やましなの駅路えきぢからは、四五町ほど隔へだたつて居りましょう。竹の中に瘦やせ杉の交まじつた、人氣ひとけのない所でございます。

死骸しがいは縹はなだの水干すいかんに、都みやこ風ふうのさび烏帽子かぶつたをかぶつたまま、仰向あおむけに倒れて居りました。何しろ一ひと刀かたなとは申すものの、胸もとの突き傷きずでございますから、死骸しがいのまわりの竹の落葉すほうは、蘇芳すほうに滲しみたようでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口かきも乾かわいて居つたようでございます。おまけにそこには、馬うま蠅ばえが一匹、わたしの足音あしなも聞えないように、べつたり食くいついて居りましたつけ。

太刀たちか何かは見えなかつたか？ いえ、何もございません。ただその側の杉の根がたに、繩なわが一筋落おちて居りました。それから、——そうそう、繩なわのほかにも櫛くしが一つございました。死骸しがいのまわりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉すほうは、一

面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございません。何、馬はいなかったか？ あそこは一体馬などには、はいれない所でございます。何しろ馬の通う路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

検非違使に問われたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、——さあ、午頃でございます。しよう。場所は関山から山科へ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗つた女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は牟子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ藪重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、——確か法師髪の馬のようでございます。丈でございますか？ 丈は四寸もございましたか？ ——何しろ沙門の事でございますから、その辺ははつきり存じません。男は、——いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携えて居りました。殊に黒い塗り籠へ、二十あまり征矢をさしたのは、ただ今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかようになろうとは、夢にも思わずに居りましたが、真に人間の命などは、如

露亦如電よろやくによでんに違いございません。やれやれ、何とも申しようのない、気の毒な事を致しました。

検非違使に問われたる放免ほうめんの物語

わたしが搦からめ取つた男でございませうか？ これは確かに多たじょうまる囊丸と云う、名高い盗ぬすびと人でございませう。もつともわたしが搦からめ取つた時には、馬から落ちたのでございませう、粟田口あわだぐちの石橋いしばしの上に、うんうん呻うなつて居りました。時刻でございませうか？ 時刻は昨夜くやの初更しよこう頃でございませう。いつぞやわたしが捉とらえ損じた時にも、やはりこの紺こんの水干すいかんに、打出うちだしの太刀たちを佩はいて居りました。ただ今はそのほかにも御覽ごらんの通り、弓矢ゆみやの類るいさえ携たずえて居ります。さようでございませうか？ あの死骸しかいの男が持つていたのも、——では人殺ころしを働はたらいたのは、この多囊丸たじょうまるに違いございません。革かわを巻いた弓、黒塗くろぬりりの箆えびら、鷹たかの羽はの征矢そやが十七本、——これは皆、あの男が持つていたものでございませう。はい。馬もおつしやる通り、法師ほうし髪がみの月毛つきげでございませう。その畜ちくしやう生せいに落おされるとは、何かの因い縁えんに違いございませう。それは石橋いしばしの少し先に、長い端綱はづなを引いたまま、路あおすばたの青

芒^{すき}を食つて居りました。

この多襄丸^{たじょうまる}と云うやつは、洛^{らく}中^{ちゆう}に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでござい
ます。昨年^{しんねん}の秋鳥部寺^{あきとりべでら}の寶頭廬^{びんずる}の後の山^{うしろ}に、物詣^{ものもう}でに來たらしい女房^{めわらわ}が一人、女の童^{わらわ}
と一しよに殺されていたのは、こいつの仕業^{しわざ}だとか申して居りました。その月毛^{つきげ}に乗つて
いた女も、こいつがああ男を殺したとなれば、どこへどうしたかわかりません。差出^{さしで}がま
しゆうございしますが、それも御詮議^{ごせんぎ}下さいまし。

檢非違使^{けんひゐし}に問われたる媼^{おうな}の物語

はい、あの死骸^{しかい}は手前の娘^{かたづ}が、片附^{かたづ}いた男でございします。が、都のものではございませ
ん。若狭^{わかさ}の国府^{こくふ}の侍^{さむらい}でございします。名^なは金沢^{かなざわ}の武弘^{ぶくわ}、年^{とし}は二十六歳^{にじゅうろくにんねん}でございしました。い
え、優しい氣立^{きだて}でございしますから、遺恨^{いこん}など受ける筈^{はず}はございしません。

娘^{むすめ}でございしますか？ 娘^{むすめ}の名^なは真砂^{まさは}、年^{とし}は十九歳^{じゅうくにんねん}でございします。これは男にも劣^せらぬく
らい、勝氣^{かちき}の女^{むすめ}でございしますが、まだ一度も武弘^{ぶくわ}のほかには、男^{おとこ}を持つた事はございませ
ん。顔^{かほ}は色の浅黒^{あさくろ}い、左^{ひだり}の眼尻^{めじり}に黒子^{ほくろ}のある、小さい瓜実^{うりざね}顔^{がお}でございします。

武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立ったのでございませうが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございませう。しかし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願いでございませうから、たとい草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございませう。婿ばかりか、娘までも………（跡は泣き入りて言葉なし）

×

×

×

たじょうまる
多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されませう。その上わたしもこうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子に、牟

子の垂絹たれぎぬが上つたものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見え
たと思う瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはそのためもあつたのでしよう、
わたしにはあの女の顔が、女菩薩にょぼさつのように見えたのです。わたしはその咄嗟とつさの間に、た
とい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうぞせ
女を奪うばうとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀たちを使う
のですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおため
ごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派りっぱに生きている、—
—しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが
悪いか、どちらが悪いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時
の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科やましな
の駅路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこ
む工夫くふうをしました。

これも造作ぞうさくはありません。わたしはあの夫婦と途みちづれになると、向うの山には古塚ふるづかが

ある、この古塚を発あばいて見たら、鏡や太刀たちが沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪やぶの中へ、そう云う物を埋うずめてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたので。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？ それから半時はんときもたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路やまみちへ馬を向けていたのです。

わたしは藪やぶの前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲かわに渴かわいていますから、異存いぞんのある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待っていると云うのです。またあの藪の茂さかっているのを見ては、そう云うのも無理はありません。わたしはこれも実を云えば、思う壺つぼにはまったのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。

藪はしばらくの間あいだは竹ばかりです。が、半町はんちようほど行った処に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合つごうの好いい場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もっともらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう瘦やせ杉が透やいて見える方へ、一生懸命に進んで行きま

す。その内に竹が疎らまばらになると、何本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩はいているだけに、力は相当にあつたようです。不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括くくりつけられてしまいました。縄なわですか？ 縄は盗ぬすびと人の有難さに、いつ塀を越えるかわかりませんか、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を頬張ほおばらせれば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも凶星ずほしに当たつたのは、申し上げるまでもありません。女は市女笠いちめがさを脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいつて来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛しばられている、——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐ふところから出していたか、きらりと小刀さすを引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈はげしい女は、一人も見つた事がありません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹ひばらを突かれたでしょう。いや、それは身を躲かわしたところが、無三むざんに斬り立てられる内には、どんな怪我けがも仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄たじょう丸まるですから、どうにかこうにか太刀も抜かず、とうとう小刀さすを打ち落しました。いく

ら氣の勝つた女でも、得物がなければ仕方ありません。わたしはどうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、——そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかったのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとすると、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのように縋りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残つた男につれ添いたい、——それも喘ぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。（陰鬱なる興奮）

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴りに打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、——わたしの念頭にあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑しい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでしょう。男もそうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたので

す。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをしると云いました。（杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです。）男は血相を変えたまま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなったかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つているのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女はどこにもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉に、断末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐって逃げたのかも知れない。——わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪つたなり、すぐにまたもとの山路へ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後の事は申し上げるだけ、無用の口数に過ぎますまい。ただ、都へはいる前に、太刀だけはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は櫛の梢に、懸ける首と思つていますから、どうか極刑に遇わせて下さい。（昂然たる態度）

清水寺に来れる女の懺悔

——その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまつと、縛られた夫を眺めながら、嘲るように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶えをしても、体中にかかった縄目は、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ぶように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしをそこへ蹴倒しました。ちようどその途端です。わたしは夫の眼の中に、何

とも云いようなない輝きが、宿っているのを覚りました。何とも云いようなない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震いが出ずにはいられません。口さえ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃いていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑んだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう気を失ってしまいました。

その内にやつと気がついて見ると、あの紺の水干の男は、もうどこかへ行っています。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛られているだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しき、悲しき、腹立たしき、——その時のわたしの心の中は、何と云えば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすって下さい。あなたはわたしの恥を御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は忌^{いま}わしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂^さけそうな胸を抑えながら、夫の太^{たち}刀を探しました。が、あの盗^{ぬすびと}人に奪^{ぬす}われたのでしよう、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし幸^{さい}い小^さ刀^がだけは、わたしの足もとに落ちています。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やっと唇^{くちびる}を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいつまっていますから、声は少しも聞えませんが、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑^{はなだ}んだまま、「殺せ。」と一言^{ひとこと}云ったのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹^{はなだ}の水干の胸へ、ずぶりと小^さ刀^がを刺し通しました。

わたしはまたこの時も、氣を失ってしまったのでしよう。やっとあたりを見まわした時には、夫はもう縛^まられたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交^まった杉むらの空から、西日が一すじ落ちています。わたしは泣き声を呑みながら、死骸^{しがい}の縄を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしがどうなったか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る

力がなかつたのです。小刀さすがを喉のどに突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている限り、これも自慢じまんにはなりません。

(寂しき微笑) わたしのように腑甲斐ふがいないものは、大慈大悲の觀世音菩薩かんぜおんぼさつも、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人ぬすびとの手ごめに遇つたわたしは、一体どうすれば好いのでしょうか？ 一体わたしは、——わたしは、——(突然烈しき齷齪すすりなき)

みこ 巫女の口を借りたる死霊の物語

——盗人ぬすびとは妻を手ごめになると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利きけない。体も杉の根に縛しばられている。が、おれはその間あいだに、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真まに受けるな、何を云つても嘘と思え、——おれはそんな意味を伝えたいと思つた。しかし妻は憎しょうぜん然と笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬ねたましさに身悶みもだえをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。

一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ、——盗人はとうとう大胆だいたんにも、そう云う話さえ持ち出した。

盗人にこう云われると、妻はうつとりと顔を擡もたげた。おれはまだあの時ほど、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中ちゆう有ゆうに迷つていても、妻の返事を思い出すごとに、嗔しん恚いに燃えなかつたためしはない。妻は確かにこう云つた、——「ではどこへでもつれて行つて下さい。」

(長き沈黙)

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇やみの中に、いまほどおれも苦しみはしままい。しかし妻は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、たちまち顔がん色しよくを失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられません。」——妻は気が狂つたように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のように、今でも遠い闇の底へ、まっ逆さかさま様さまにおれを吹き落そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるか？ 一度でもこのくらい呪のろわしい言葉が、人間の耳

に触れた事があるうか？ 一度でもこのくらい、——（突然迸るほとばしるときちようしに嘲笑ちようしやう）その言葉
を聞いた時は、盗人さえ色を失つてしまった。「あの人を殺して下さい。」——妻はそ
う叫びながら、盗人の腕に縋すがつてゐる。盗人はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも
返事をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに蹴倒けたおされ
た、（再びふたたび迸るふたるとき嘲笑）盗人は静かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやつた。「あの
女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事はただ領うなずけば好よい。殺
すか？」——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦ゆるしてやりたい。（再び、長き沈黙）

妻はおれがためらう内に、何か一ひとこえ声叫ぶが早いか、たちまち藪の奥へ走り出した。盗
人も咄嗟とつさに飛びかかったが、これは袖そでさえ捉とらえなかつたらしい。おれはただ幻のように、
そう云う景色を眺めていた。

盗人は妻が逃げ去つた後のち、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄なわを切つた。

「今度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまう時に、こう呟つぶや
いたのを覚えている。その跡はどこも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声がある。おれ
は縄を解きながら、じつと耳を澄ませて見た。が、その声も気がついて見れば、おれ自身
の泣いている声だったではないか？（三度みたび、長き沈黙）

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀さすが一つ光っている。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺さした。何か腥なまぐい塊かたまりがおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさだろう。この山陰やまかげの藪やぶの空には、小鳥一羽さえず囀さえずりに来ない。ただ杉や竹の杪うらに、寂しい日影が漂ただよっている。日影が、——それも次第に薄れて来る。——もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまわりには、いつか薄闇うすやみが立ちこめている。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀さすを抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮あぶが溢あふれて来る。おれはそれぎり永久に、中ちゆう有ゆうの闇へ沈ちゆうんでしまった。………

(大正十年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「新潮」

1922（大正11）年1月

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997年11月10日公開

2011年5月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

藪の中

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>